

《ふゆ》

フクジュソウ

新春を祝う花として「福寿草」と書く。他の植物に先駆け、大地から黄色の花芽を出し、存在を知ることができる。次第に茎と葉が伸び、日光が当たると花弁が開く。年の始め、寄せ植えの鉢物が人気。花言葉は「幸せを招く」。花壇に植栽してある。



スイセン

別名を「雪中花」といい春をいち早く告げる。秋に球根を植え翌春に花を楽しむ。スペイン、ポルトガルなどが原産で、約30種の野生種がある。ニホンスイセンは一本の茎に、中が黄色で白い小輪の花を4～5個付ける。園内の至る所で見る事ができる。



カンヒザクラ

2月下旬、園内のサクラでは一番に開花し、ヒカンザクラともいう。一つの芽から2～3個の濃いピンク色の花を下向きに、房状につける。更に開くのでは？と待ちわびているうちに、突然に散ってしまうので、写真や写生には注意が必要。沖縄原産で、元大橋口入口付近に植栽。



ボケ

日本固有種でバラ科の植物。明るい野原や傾斜地に生え、1月～2月、葉が出る前に白やオレンジ色の花が咲く。10月～12月、丸みを帯びた果実は黄色く熟し果実酒に。酸味があるが香りが良い。トゲに注意。梅林横に植栽。



ウメ

中国原産で、日本へは奈良時代に伝わる。花は2月に開花し、辺り一面に漂う梅の香は、園内に春の訪れを告げる。梅林からウメの花越しに見る冬の富士は格別で、絶好のビューポイントとして人気がある。収穫された実は梅干しにされ、各種イベントで販売される。



マユミ(実)

山林に自生する雌雄が異なる植物。雌株は5月～6月、白色で小さな4弁の花を付ける。四角形の実が吊り下がる姿はとても愛らしく、晩秋から冬にかけ長く楽しむことができる。熟すと果皮が裂けて朱色の種子が飛び散る。梅林横に植栽。



アオキ(実)

日本原産の常緑植物。強い日差しを嫌い木漏れ日を好む。4月～5月、紫褐色の小花が密集して咲く。雌株と雄株は別で果実は雌株に付き、初冬、深紅色に色づく。富士講碑へ続く路に多く見かける。



イロハモミジ

一年を通じ、葉の色の变化を楽しむことができる。晩秋から初冬にかけ、真っ赤に染まる紅葉が美しい。春の新緑も格別。初秋、翼状に水平に開いた果実が、竹とんぼのように螺旋を描きながら一斉に風に舞う様は情緒がある。花壇横に植栽。



オオシマザクラ

「大島」の名の通り伊豆大島原産。高さ10m、幹は50cmほどになる。3～4個のやや大きい花を房状に付ける。葉は良い香りがあり塩漬けにして桜餅に使う。園内に多く見られ、花見の会の主役を務めている。



モウソウチク

ふじやま公園の代表的な植物。成長が早く、太さ20cm以上、高さ12mにもなる。4月下旬には、竹林整備を兼ね筍掘りを行っている。竹炭や竹とんぼ、農具などの物作りに利用。富士講碑から広がる散策路の竹林が見事。



クマガイソウ

日本、台湾などに群生するが、自生のはなかなか見る事ができない。花は8cm位、野生のランでは一番大きい。袋状に膨らみ横向きに開花し、薄紫の模様がある。4～5月頃花壇で見ることができる。武士(熊谷直実)の背負った母衣にたとえたとか。



シラン

シャガが終ると、長屋門前は、蕾から一気に花を咲かせるシランで園内が華やぐ。赤紫色のものが一般的であるが、園内では写真の「シロバナシラン」が多く見られる。宿根草のため、春、思わぬところから芽を出す。



《はる》

コフシ

早春、葉が出るより先に白い花が咲き、ほのかな香りがある。花弁は6枚で花の下に1枚の葉が付くのが特徴。花後は拳のような果実の集合体ができる。里に春を告げ開花を合図に農作業の目安とされた。



シャガ

4月～5月、淡い紫色の花が長屋門前に群生する。花は一日で萎むが次々と新しい花が咲き園内を彩る。根の張りが浅い分、細長い葉で支えあう。湿気のある明るい日陰を好む。アヤメの仲間。



アヤメ

5月上旬から紫色の花をつけ、花壇で見ることができる。多くは山野の草地に自生する。カキツバタやハナショウブとは、花びら基部の模様や葉の微妙な違い、生える場所で見分ける。「いずれあやめかきつばた」は優劣つけがたいことの例え。



シダレザクラ

春、淡紅色の小さな花を枝先に付ける。エドヒガン系の園芸品種。園内では元大橋口などに植栽。3月下旬～4月、オオシマザクラやヤマザクラより少し遅れて咲く。樹齢何百年という銘木、古木が全国にあり、近隣では、小田原、長興山紹太寺のものが有名。



この「ふじやま公園に咲く花」は、ふじやまだより150号を記念し、これまで「ふじやま公園の植物」に掲載した植物から抜粋して編集しました。

《なつ》

アジサイ

日本のガクアジサイが原種といわれ写真のものは西洋の改良種。半日陰を好み、土壌性質により花の色合いが異なるといわれる。公園では、梅雨の時期、西洋アジサイの他、ガクアジサイ、アマチャなど数種を園内至る所で楽しむことができる。



シロツメクサ

クローバーの名で親しまれるヨーロッパ原産の帰化植物。四つ葉のものは幸福の象徴とされる。



オランダからガラス製品の詰め物として日本に来たのが名前の由来。レンゲ、ニセアカシアなどと並び蜜源植物として養蜂家に利用される。

ヒルガオ

淡いピンク色の花は昼に咲いて夕方には萎む。万葉集では「容花」(かほばな)という名で詠まれ、「高円の野辺のかほ花面影に 見えつつ妹は忘れかねつも(大伴家持)」などの歌がある。地下茎で増え、園内至る所で見られる。



ムラサキツユクサ

北アメリカ原産で丈夫で育てやすいのが魅力。春から秋にかけ、紫色の花が朝開き午後に萎む一日花。順次咲くので長い期間楽しめる。朝方、花先に結露する様は趣がある。花びらを染料として使うツユクサとは異なる。花壇に植栽。



ドクダミ (八重)

梅雨時期花壇で見ることが出来る。4枚の白い花弁が八重になり清楚で可憐な花を付ける。独特な匂いと繁殖力は一重と変わらない。昔から「十薬」ともよばれ、さまざまな薬効がある。八重は珍重され愛好者も多い。地下茎で繁殖する。



ビヨウヤナギ

黄色い花びらから雄しべがはみ出して付く。春から初夏の太陽の光に雄しべが輝き美しい。未央柳の字は、長恨歌の一節にある「太液の芙蓉 未央の柳」が語源といわれている。公園では元大橋口からの園路に植栽。オトギリソウ科の植物で柳の仲間ではない。中国原産。

ウコン (花)

熱帯アジアの原産で、秋、筒状に白い大きな花をつける。めったに見られない真っ白な花は一見の価値あり。根は染料、カレー粉などに利用するが、最近は肝機能を回復する効果があると人気。花や葉が枯れる11月上旬から収穫できる。農園に植栽。



ハギ

秋の七草の一つ。関東で見られるのはミヤギノハギやヤマハギが殆ど。中秋の名月に園路わきに植えられたハギが良く似合う。「さを鹿の朝立つ野辺の秋萩に 玉と見るまで置ける白露(大伴家持)」など万葉の時代から萩を詠んだ歌は多い。

クヌギ (実)

4月～5月、黄褐色の紐状の花を数多くぶらさげる。実は花の咲いた翌年の秋に碗形した苞葉に包まれ2cm位のドングリとなる。長屋門前にあるクヌギの林が、年間をを通じ公園を引き立てている。樹液はカブトムシやクワガタが好む。



ていることが名前の由来とされる。花片は強く反り返り他のホトギスと区別する。「杉の木坂」登り口で見かける。

ヤマホトギス

日蔭に自生するユリ科の植物。花期は8月～10月。白地に紅紫の斑点模様を付けて咲く。この斑点がホトギスの胸の斑点と似

《あき》

ガマズミ (実)

里山や雑木林に生える日本固有種の樹木。5月、白い小花を多数付け木々の緑に映える。9月～11月、実は赤くなり秋の風情を醸し出す。実は酸味のある深紅の果実酒となる。農園下にあるものは見事。



アレチヌスビトハギ

北アメリカ原産の帰化植物。夏から初秋にかけ赤紫色の花を咲かせる。豆のさやは4～5節で、さやが2節の日本在来のヌスビトハギと区別できる。さや表面の繊毛はかぎ状で、衣服に付き運ばれる。園内至る所に見られ、秋は、足元に注意が必要。



ツワフキ

晩秋から冬にかけ黄色い花をつけ、園内至る所で見られる。キク科の植物。葉や茎はキャラブキなど食用になり民間薬にも用いる。花期は長く、「いくたびか時雨のあめのかかりたる 石路の花もつひに終はりぬ(斎藤茂吉)」と詠まれている。



ハゼノキ

秋一番、梅林下の園路で、真っ赤に紅葉して公園を彩る。秋にたくさん結実する小さな実から和ロウソクの油が採とれるため、かつては、ふじやま一帯に植栽された。かぶれるヤマウルシと似ているが見分けが難しい。

